

羅森の目に映った「鎖国」と「開国」の日本

程 永 超

要旨：150余年前の1854年、中日間の人的交流がまだ少なかった時代、中国人羅森は、アメリカ合衆国艦隊のマシュー・ペリー提督の漢文通訳として日本を訪問していたことがある。羅森はアヘン戦争後初めて日本、特に北海道（函館）を訪れ、記録を残した最初の中国文人である。彼は日本において多くの文化交流を経験し、後に香港の英華書院から発行された月刊誌『遐邇貫珍』で近代中国初めての日本見聞録『日本日記』を連載し、幕末の日本を中国に紹介した。羅森は日本開国の目撃者であり、日米会談の参与者でもある。本文は近代中日文化交流の先駆者である羅森の人物像を紹介した。まずは羅森という人物を紹介、次に彼の書いた『日本日記』を通して羅森の目に映った日本像、主に羅森の目に映った「鎖国」の日本と「開国」の日本を分析し、そして中国人の羅森に不思議と思うものをいくつか拾って紹介、最後にまとめることにする。

キーワード：羅森 『日本日記』 中日交流 鎖国 開国

はじめに

中日交流は中国の先秦時代いわゆる日本の縄文・弥生時代まで遡ることができ、渡来人によって中国の文化を日本に伝えた。その後、遣隋使、遣唐使等によって、中国の先進文化、技術などがどんどん日本に伝えられたが、中国人は日本という国についてあまり知らないままである。江戸時代になると、西力東漸の情勢下で江戸幕府が公布したきびしい鎖国令と清朝の海禁策のため、近世における中日両国の交流、特に文化交流は極めて少なかった。当時、日本は朝鮮と琉球¹を「通信の国」として、中国とオランダを「通商の国」として扱い、ほかの国々の船は全部日本に入ることは禁じられていた。しかし、中日両国交流の長年の沈滞を打ち破った一人の男の人がいた。それが中国広東人羅森であり、彼の書いた『日本日記』は、近代中国人が書いた初めての日本見聞録として、以前の様々な記述よりもとても詳しくしかも深く書かれ、貴重なものとして中日交流史上に重要な地位を占めていた。羅森の『日本日記』のおかげで、中国人は日本のことをより全面的に分かり始めたのである。彼に続いて、駐日公使としての何如章が『使東述略』、王之春が『談瀛録』、傅雲龍が『遊歴日本図経余紀』などを書いており、中国人が日本に行った時の見聞及び日本社会への見方を記録している。

先行研究

従来、羅森が残した史料が少ないため、彼に関する研究がなかなか進めることができない。その極少ない研究者の中で、目立っているのは以下の学者たちである。

まずは、王暁秋氏がその論文「近代中日文化交流の先駆者羅森」² (1994)、「幕末の日米条約交渉に立ち会った中国人羅森—150年前の東アジア史における利他行為の一例として」³ (2007) で羅森を研究したことがあり、羅森研究の第一人者と言っても過言ではない。残念ながら、筆者が不詳なため、詳しく述べることができない。また、彼が編集した『羅森等早期日本遊記五種』(1989)、『中日文化交流史話』(1996)、『近代中国と日本—互動と影響』(2005)などで、羅森を紹介したことがある。

そして、鄭青榮氏は横浜市内の保土ヶ谷公会堂で「中国人羅森の事跡——近代日中文化交流の先駆者・安政開国の『助っ人』」と題して講演を行った。王勇氏がその編集した『中日文化交流史大系・人物巻』(1996)と『中国史のなかの日本像』(2002)などの少々羅森を紹介したこともある。鐘叔河氏はその編集した『東洋から西洋へ』(2002)で羅森に触れたこともある。陶徳民氏はその論文「日米和親条約交渉における中国語の役割——羅森『日本日記』等に関する再考」(2005)⁴で日米間の意思疎通における第三国の言語である中国語の介在の実態を披露した。

最後に、邢永鳳氏はその論文「日本の「開国」と中国人——羅森と彼の『日本日記』」(2007)⁵で訪日の経緯、契約の調印、開国と鎖国、中国文化への憧れ、日本名士との付き合いなどの五つの方面から羅森が日本開国の中で働いた役割を詳しく紹介していた。

まとめてみれば、先行研究は主に羅森の紹介と契約調印で果たした役割に注目し、本文では羅森の目に見た開国直前の日本、つまり鎖国の日本が新しい西洋の思想からショックを受けた時の日本実像、主に「鎖国」と「開国」⁶の境にある日本像について対比分析していくつもりである。

1 羅森その人

1853年6月3日、アメリカ東インド艦隊司令官マシュー・ペリー⁷将軍は、黒塗りの軍艦（「黒船」）四隻を率いて日本に来航し、武力で幕府に開国をせまり、大統領の親書を受理させ、再航を約束して引きあげた。翌年（1854）1月、ふたたび来日したペリーは、ついに幕府に日米和親条約（即ち「神奈川条約」）を結ばせ、日本を開国させるのに成功した。ペリー二度目の来航に、一人の中国人（清国人）がペリーに随行した。ペリーの首席通訳官サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ（S. W. ウィリアムズ）⁸の中国人助手——羅森である。当時日本の有名な画師歙形赤子が一人一人の来航者に全身像を描いたことがある。その中では、清朝人羅森が多くのアメリカ人の中に目立っていた。では、どうして日米交渉の中で、突然一人の中国人が現れたのだろうか。

徳川幕府の鎖国政策の終焉をもたらした日米交渉において、日本語と英語だけではなく、中国語とオランダ語も公式な交渉用語であった。アメリカ側の首席通訳官 S. W. ウィリアムズは中国における長期滞在の経験があり、日本語よりも中国語の専門家であった。外交文書や筆談記録の作成のため、教養のある中国人助手の協力を必要とした。そのため、彼は1854年ペリーの二回目の来航時に羅森を雇った。

羅森は字向喬、広東南海人である。『遐邇貫珍』⁹の編者の言葉「一人の清朝人が編者の親友で、去年アメリカの火船に乗って日本に行き、契約の調印に助力したので、自分の見たこと聞いたことを日記に整理し、帰国後編者に授けた」ということである。（「今有一唐人，為余平素知己之友，去年搭載花旗火船游至日本，以助立約之事，故將所見所聞，日逐詳記，編成一帙，歸而授余。」¹⁰）そして、羅森も日米交渉の背景について『日本日記』にも以下のように述べた。

「合眾國金山名駕拉寬¹¹，近今人多往彼貿易。洋西面遼闊，欲設火船，而石煤不足；必于日本中歩之區，添買煤炭，能設火船，便于來往。是故癸丑三月，合眾國火船于日本商議通商之事。」

すなわちアメリカにはカリフォルニアというところがあり、最近そこの人々がここへ貿易に来る事が多い。何故ならば、海が広く、石炭の補給が難しいことから、日本で火船に必要な石炭を買わなければならない。そのため、1853年3月に、アメリカの火船が通商のために日本へ渡ったのである。つまり、貿易のため火船が必要である、しかし火船の燃料である石炭が不足で日本で補給しなければならない。そのため、日本へ通商の相談に行くことになる、という。

羅森は英語が非常に達者で、漢文・漢詩に精通する文人である。日本語はまったく話せなかった。羅森は日本と琉球を訪問する時、日記をつけていたが、その日記の中国語版と英語版は香港帰着後まもなく出版された。中国語版は彼の帰国後、「日本日記」という題名で香港の英華書院から発行された月刊誌『遐邇貫珍』に連載された。英語版はのちにアメリカ議会の公式文書『ペリー艦隊日本遠征記』（1856-1857）にも収録された。

羅森の『日本日記』は、実際の見聞に基づいて書かれており、明治維新をきっかけに変貌する前の日本像を知るうえで、多くの示唆を与える。ここで、羅森の目に映った日本像の断片を拾って紹介してみよう。

2 羅森の目に映った「鎖国」の日本

2.1 鎖国の原因

日本の鎖国体制は、第2代将軍徳川秀忠の治世に始まり、第3代将軍徳川家光の治世に完成した。その原因について、羅森が『日本日記』の中で二回指摘したことがある。

まずは当時の日本の学者である平山謙二郎が羅森に宛てた手紙の中で、以下のように書いてある。「我祖宗絶交于外邦者，以其利以惑愚夫，究理之奇術以騙頑民。頑民相競，惟利是趣，唯奇是

趣，駸駸乎至于忘忠孝廉恥，而無父無君之極也。原夫天道流行，發育萬物之妙理，則茫茫堪輿之間，隨冰海夜國人，亦孰非天地之赤子？孰非相愛相友之人？所以聖人一視同仁，不分彼此也。全地球之中，禮讓信義以相交焉，則大和流行，天地惠然之心見矣。若夫貿易競利以交焉，則爭狠獄訟所由起，寧不如無焉。是我祖宗所深慮者也。」

つまり、日本人の祖先が外国との交渉を規制したのは、外国がその利益を持って日本の国民を愚弄し、先進技術を持って国民をだますからである。もし、国民がその影響を受けてひたすら利益のみを追求したならばきっと忠孝廉恥さえ忘れ、上下主従の身分秩序さえも忘れてしまうだろう。もし貿易のために利益を競い、けんか乃至訴訟さえ起こしたならば、もともとの貿易を取り締まったほうがより効率的である。これは我が先祖が心配していたものである。

羅森に送ったこの書簡の中で、平山謙二郎は独自の時局分析を行い、国際関係および国防について以上のように持論を展開している。国家関係と国際交流は「礼義廉恥」等儒教思想を原則とすべきであり、礼讓と信義こそが「万国交際之道」と主張した。その一方、利益ばかりを追求める西洋の行き方は貪欲者の争いと社会の混乱を招くと批判した。平山は、幕府が外国との交流のため、日本人の信仰と精神に影響する恐れを強く感じ、しかもその封建支配の強化を図るに不安の念を起こさせたと思ったのである。一言でいうと、幕府は外国から日本の統治を脅かされるのを恐れていたのであろう。

そして、横浜に着くと、羅森が「日本人はポルトガル人のこと¹²で鎖国令を公布してから、もう二百余年が経った。この間、あまり外国人を見たことが無い」（日本人民自從葡萄牙滋事，立法據之，至今二百餘年，未曾得見外方人面）」と述べたように、鎖国の厳しさを説明した。

2.2 淳朴の風紀と安定な社会

『日本日記』によると、ペリー提督一行はまず琉球、横浜、下田、箱館¹³、そして下田、琉球に、また中国の浙江、寧波、厦門を経て香港に帰った。『日本日記』の中で、琉球・横浜・下田・箱館四地の風俗について詳しく記している。

たとえば、琉球の那覇では、

「人民亦甚謙恭……然而百姓亦畏官長。飯食亦甚粗粕，甘守樸儉，不務奢華，亦鮮欺詐。板門紙窗，夜間亦不防盜。會見途中拾物，亦能已返原人。公門之内，泠泠落落，並無案牘之煩。淳朴之風，略有同于上古之世。」

すなわち、百姓は中国と同じく官吏を畏敬する。……食事も粗末で、質素な生活を営み、贅沢を好まず、詐欺もめったに無い。家屋も戸は紙を糊張りしただけの簡単な造りで、盗難事件もない。途中で落とし物を拾ったら、皆落とし主にまた返す。役所に訪れる人もなく、公文書もない。その淳朴の風紀は、まるで上古の世のようである、との見方を述べている。

下田では、羅森が「盗難事件があまりなく、紙糊の門戸なのに盗賊の弊害がない。」（搶掠暴劫

之風，亦未嘗見。破其屋，門雖以紙糊，亦無有鼠竊狗偷之弊。）と述べたように、治安が非常にいいである。

箱館では、「百姓が謙遜で、官吏を畏敬し、官吏を見たとき、みな厳肅で道端を跪く……この店も紙で作った……」（百姓卑躬，敬畏官長。人民肅穆，膝跪路旁……此處鋪店亦用紙糊……）と描いたように、市民が礼儀正しくて素朴である。

だから、羅森は日本の社会を「その淳朴の風紀は、まるで上古の世のようである（淳樸之風，略有同于上古之世）」と感嘆している。ここの「上古の世」とは、『後漢書』（倭伝）に「婦女は淫をしないし、嫉妬もしないし、争訟も少ない」（婦女不淫不妬無争訟）と描かれた君子国のイメージと重なり合っているように思われる。ここでは、羅森は日本人および日本社会に対する評価は非常に高いものだった。これはアヘン戦争や太平天国の乱の最中に青少年期を送った羅森にとって、国家の安泰や社会の治安が大きな関心事で、素朴の日本社会を羨む気持ちを示していた。

2.3 官吏登用制度

官吏登用制度について、両国の大きな違いを羅森は次のように指摘している。

「文、武、藝、身、言皆取，而詩不以舉官。所讀者亦以孔孟之書，而諸子百家亦複不少。所謂讀書而稱士者，皆佩雙劍，殆尚文而兼尚武歟？」

つまり、文・武・芸・身・言など総合的に考査して優れた者を選んだが、中国のように詩だけを重視するのではない。日本の官吏は孔子や孟子などの諸子百家の書物をたしなむ文人であるとともに、みな脇に二本の刀を差す武士でもある、ということである。羅森は日本では文を尊びながら、武をも尊ぶだろうか強く感じている。

また、中国の官吏登用制度について、羅森は次のように説明した。

「中國讀孔孟書，申明孔孟之理。以文字分為八股，謂之文章。文章之外，別詠一詩。雖小試、會試，亦複如此。」

すなわち、中国では孔孟の本を読んで、孔孟の道理を理解し広め、八段落¹⁴という形式で書かれたものは文章である。文章のほかに、詩歌を一首詠まなければならない。小試にしても、会試にしてもそうである。ここから中国で官吏を選抜するとき、やはり文書を書く能力と詩を読み能力を重要視することがわかる。

以上で分かるように、中国では、文人と武士は異質なものとみなされ、両者を混同することはほとんどない。したがって、帯刀しない中国の官吏と大いに異なるので、日本の役人の姿は羅森の目には違和感が強かった。両刀を脇にさして孔孟の道を論じ、詩文の唱和を交わす日本の「士」は羅森にとって本当に不思議なことであるだろう。

2.4 男女の区別

男女の区別について、これらのところはそれぞれ異なっている。

横浜における男女区別について、羅森は次のように説明した。「女性はよそ者との対面を恐がり、羅森は横浜で一人の女性だけ見たことがある」(女畏見外方之人，予横濱只見一婦女而已)。下田の状況について、羅森は次のように説明した。「百以上の男女たちが寺に入り、女でも「恥」だからと避ける必要がない」(男女千百入寺觀看……女亦不羞避……)。昔「女人禁制」というものがあり、その時の下田でもそういう風俗がなくなったようである。しかも、半裸のまま人前に出たりする女性も多く、男性は下半身を露出しても恥ずかしいと感じない一方で、女性も平気で春画に見入った。男女混浴の銭湯さえあり、男女は一つの風呂場で何の恥じらいもなしに風呂につかることさえできる(「婦人多有裸裎傭工者。稠人廣眾，男不羞見下體，女看淫畫為平常。竟有洗身屋，男女同浴于一室之中，而不嫌避者。」。)ここから見れば、下田という町はとても自由な町で、男女の区別がほとんどなかったようである。羅森はこのような性風俗にたいへん驚いた。中国の保守的な性風俗と違って、日本はとても開放的で、「羞」(恥)を避けないと強く感じた。

箱館では、「婦人はよそ者との対面も恥ずかしがり、自分の部屋に閉じこもり、あまり人前に顔を出さない。風習は保守的で、人民はあまり淫辞を説らず」(婦女羞見外方人，深閨屋內，而不出頭露面，風俗尚正，人民鮮說淫詞)。しかも、羅森は箱館では、「一人の女性さえ見たこともない」(不見一婦人面)。

2.5 中国文化への憧れ

日本の知識人がもちろん、一般庶民も中国文化への憧憬が根強いことから羅森の共感を呼んだ。

那覇では、民間の中には中国の言語と文字がわかる人もいる。「(民間亦有識中國言語字墨者)」。そして、墓も中国の明塚と異ならない(「另有人家祖墳，與中國之明家無異」)などいろいろある。甚だしきに至っては、琉球の総理大臣から送られてきた詩でさえ中国の程明道¹⁵の詩である(「總理大臣書字一幅贈予，是程明道先賢詩也」)。

横浜では、羅森は日本の官吏と話して、言語が違うので、筆談で交流が行われ、中国文化を敬慕するなど(「不同言語，與其筆談……景仰中國文物之邦云」)。ここで、中国語と日本語に似ている文字が多いので、お互いに言語がわからなくても書くだけで交流できることから、日中文化の縁深さがわかる。また、中国の文字や詩をこよなく愛する人が多く、公館に着くと、多くの人が団扇に中国の詩と詞を書き記してもらい、一ヶ月で五百以上の団扇を書いた。「(故多酷愛中國文字詩詞。予或到公館，每每多人請予錄扇。一月之間，從其所請，不下五百餘柄。)」

下田では、女性が布を織る方法は中国と異ならない、鉄を打つや木材の加工の方法なども中国と大体同じである(「女人織布與中國無異，打鐵做木，亦與中國略同。」。)また、男女とも団扇に中国の詩と詞を書き記してもらい、羅森は一ヶ月で千以上の団扇を書いた(「男人女子俱尚扇。予于下田，一月之間，所寫其扇不下千餘柄矣。」。)。

函館では、別れに臨み、謙二郎がある唐詩を団扇に書いて羅森に送った。その唐詩曰く、渭城の朝雨輕塵を潤す、客舎青々柳色新たなり。君に勸む更に尽くせ一杯の酒、西のかた陽関を出づれば故人無からん（「予將臨別，謙二郎以唐詩錄扇贈予曰：渭城朝雨浥輕塵，客舎青青柳色新。勸君更盡一杯酒，西出陽關無故人。」）。唐朝の有名な詩人王維の詩である。ここから見れば、日本の学者たちは中国の詩人と詩作に詳しく、手軽に使うことができ、中国文化への敬慕が見られる。

また、羅森が日本で接触した人物はとても多く、例えば、林大学頭、松崎満太郎、平山謙二郎、堀達之助、名村五八郎、合原猪三郎から吉田松陰、大槻盤溪、関蘭梁などに至るまで、幕府関係者にしろ、維新思想家・儒学者・漢詩人にしろ、みな儒学・漢詩文に長じていた人である。

3 羅森の目に映った「開国」の日本

3.1 対外態度

琉球では、ペリー一行は輿に乗って皇宮に着き、の宴席の後、官吏たちからいろいろな物を受け、たとえば団扇、煙草、織物など。粗末なものではあったが、琉球側のほんの気持ちで、アメリカ側もいろいろと贈り返した。（「……提督被里、衛廉士等一班將官，布列威嚴，與予乘轎至皇宮……享宴甚豐……宴后，各官皆饋，有紙扇、煙包、布帛等項、是物雖粗，此亦世子之恭敬外國，故亞國亦以禮物而返贈之。」）両方ともとても礼儀正しく接していたことが伺える。

横浜に着いたばかりの時、羅森は以下のように記した。

「初事，兩國未曾相交，各有猜疑。日本官艇亦有百數泊于遠岸，皆是布帆，而軍營器械各亦準備，以防人之不仁。」

すなわち、初めは、付き合ったことがないから、両国ともそれぞれ疑っていた。百隻以上の日本官艇は向こうに泊まり、武器を整え、戦争に備え、アメリカの進攻を防ぐのである、ということである。

そして、次の日、日本側から二・三隻の官艇が来て、船尾に「御用」という字が記されてあった。アメリカ人が彼らを火船に招き、礼儀正しく持て成した（「次日，有官艇二三只來視火船。船尾插一藍白旗，上寫“御用”二字。亞人招之上船，以禮相待……」）。契約を調印したあと、両国が和解して、疑いが氷解した（「由是兩國和好，各釋猜疑」）。

以上は政府からの対応である。さて、国民の反応はどのようであったか。

琉球の那覇着いた日はちょうどお正月で、羅森が町に出て、子供たちに小判をあげたら、喜んでいる（「甲寅正月初一，予上岸游玩，見街上兒童甚多。分以銅錢，各極歡喜。」）。那覇の人々は羅森一行を外国人としての疎外感と距離感が全然ないことが見える。

下田では、「外国人が現われると、男女とも先を争うようにして見に行った。」（毎見外方人，男女皆趨而争看）、「午後、アメリカの兵士が列になって町を回り、男女たちが塀のように取り囲ん

で見ていた。」(午后、亞國官兵排列隊伍，歷游各町，男女人民觀者如堵)などの記述もいっぱいある。

一方、箱館では、最初、半分以上の市民は理由もわからず、遠くへ逃げていたが、後政府が安心させ、彼らが再び港へ帰って貿易を続けた。「(因亞國船初至此，人民不知何故，是先逃于遠鄉者過半。蓋以溫語安撫百姓，乃敢還港貿易。)」という状況である。

以上で述べたように、下田は港町であったため、開放の程度から見て、やはり箱館より高い。

3.2 対外貿易

那覇では、「バーター貿易の形式で男性の変わりに、女性が携わっていた。しかし、其の頃外国の貨幣は使用できなかった。」(男不貿易，婦女為之，以貨易貨，而外方之金銀弗尚焉。)、
「もし、外国人が何かを買いたいなら、役所に報告し、役人がその代わりに買うのである。」(我等外國之欲買什物，須言于官，官為代辦。)などと述べるように、外国人の買い物問題については琉球政府がある程度の対策を制定していた。

下田では、

「所揀物品，則書名于物上，記價，然后店人送到御用所，交價于官。官者，海關之吏也，近藤良次主之。御用所即其處之海關也，設官數名，而司買物之事。每洋銀一元，作錢一千六百文。其日本則有當百之大錢，亦有純金一分，亦有純金大判，亦有一分銀，亦有二朱金。二朱則表金而里銀也，世間乃通用，可易當八百枚。一分銀可易當百十六枚。四分銀可易一小判。黃金大判則以分銀百餘方，按時價而兌換。」

もし購入したいものがあるのであれば、そのものに名前と値段を書き、店員が御用所に送り、外国人が直接に官吏にお金を払う。官吏というのは税関の官吏であり、近藤良次の所管する人々である。御用所というのはその税関のことで、いくつかの官吏があり、買い物に関することに携わる。1ドルは1600文に値する。日本には百円があり、金一分と金の小判、銀一分と二朱金もある。二朱は表が金で、裏が銀で、日本では通常、八百枚に値する。一分銀は160枚、四分銀は1枚の小判に換える。黄金大判は時価によって百枚以上の分銀に換えることができる。

ここからわかるように下田では税関さえ設けられ、外国人との貿易のため、両替の規則も制定され、時価によって両替できる。

函館では、岡脊山に医館があり、イギリスのバーナード・ジャン・ベッテルハイムがそこに住んでいる(「于岡脊山見有醫館，英國伯德令¹⁶在此居住。」。)また、1ドルは1400文に値する。後世に伝わるため、外国船向けの燃料と水の値段も千斤ごとに条約に規定されている。「(每銀一元準錢一千四百文。外國洋船所取薪水，每千斤亦議定價在條約內，以垂久遠。)」両替の規則と外国船の燃料と食料の補充について契約に詳しく規定されることも記した。

ここからわかるように、この三つのところも、外国人と貿易した経験があり、その規則につい

でもさしあたってのルールが制定されている。

3.3 外国への関心

そのとき、鎖国の日本にいるにも関わらず、外の世界に関心を持っている日本人も多くいる。たとえば、平山謙二郎という人があり、まっすぐで博学な人で、羅森に中国治乱の原因を聞きに行った。（「有平山謙二郎者，其人純厚博學，趨而問予中國治亂之端。」）そして、「しばらくして、平山は『南京紀事』と『治安策』の二冊を読み返し、初めて中国治乱の原因を知っている。（頃者，披視《南京紀事》及《治安策》二冊子，熟讀數四，始審中國治亂之由）」

また、『日本日記』には以下のような記録がある。

「適遇菊池森之助，談，問亞國所遵何教？予曰：“所奉者獨一神，神即造化之主宰。”

つまり、菊池森之助と出会って、彼にアメリカが信じている宗教は何なのかと聞かれ、信じているのは一つの神、自然界の創造者であると答えた、ということである。

ここからわかるように、日本で一般民衆から学者たちまで、外国に関心を持っていて、外国のことをもっと知りたいという気持ちが一般的である。

3.4 新しい技術への好奇心

『日本日記』によると、ペリーが日本の「京城大君」¹⁷に火輪車（汽車）、浮浪艇（汽船）、電理機（電話）、日影像（カメラ）、耕農具などを贈った（「亞國以火輪車、浮浪艇、電理機、日影像、耕農具等物贈其大君」）。その一方、日本は漆器、磁器、絹などを返礼として贈った（「亦以漆器、瓷器、絹縐等物還禮」）。アメリカから贈られた西洋の「奇器」は日本人を驚かせ、汽車の試運転を見学した人々はみな「その奇を称う」（人多稱奇）という。

ここでは、日本人は西洋機械文明に対し、濃厚な好奇心が現われ、蒸気機車関車、汽船、写真機や電信機などを熱心に観察し、実際に体験してみようとする人が多いと、羅森は感心している。

4. 羅森の目に映った不思議なものとは

初めて日本に来た羅森にとって不思議なことがいろいろある。たとえば、前述の男女の区別など。以下では、そのいくつかを拾って紹介してみよう。

4.1 家畜

横浜では、羅森は「ここで民衆は牛とか羊とか豚とかの家畜を飼うのではなく、それを屠殺してお客さんのもてなしにすることもない。私は鶏を何年間養っている家も見ることがある」（其處人民不畜牛羊豚豕，亦不宰生而食客，予見人家畜雞至數年而不宰者）と記した。実は、ここで、

当時の時代背景がわからないときと不思議に思うことが多いだろう。室町時代から肉を喜んで食べる人が南蛮人であるという印象が強く残され、のちのキリシタン弾圧が始まると、家畜を食べるといふ肉食は日本の農業経済をゆるがすし、キリシタンの日本侵略の一手段として受け止められた。「肉食する者はキリシタン」という考え方が一般に行き渡り、肉食の習慣はすたれてしまったということである。

4.2 力士

『日本日記』のなかで、もっとも面白いのはたぶん「肥人」についての記録であろう。肥人たちが活躍したのは、林大学頭がペリー一行に贈物を渡す場面だった。

「林大學頭饋以粟米數百包，每包約兩百餘斤重。欠肥人九十餘名，俱裸體，一夫或舉二三包。不一時而數百包之粟米盡遷于海畔」。

横浜で、ペリーは林大学頭の屋敷をおとずれ、「粟米數百包」を贈られた。九十余名の「裸の肥人」はひとつ「二百余斤」の俵二三個を軽々と持ちあげて海辺にまで運んでくれた。さらにペリーたちの目の前で大相撲試合を披露した。羅森がこれを見て「日本に勇力の人が多い」（日本多勇士）と感嘆を吐かせた。実は、ここで、日本がアメリカに自分の国力をひけらかすためにわざわざ相撲の力士を出した一戦略である。

5. 結びにかけて

ともあれ、中国広東人羅森は安政開国という世界史的にも重要な出来事にめぐり合い、躍動する歴史の瞬間に立ち会い、日本近代史の転換点に鮮やかな足跡を残した。それに、日本の那覇、横浜、下田、そして箱館などに足を踏み入れ、地元の人々と誠実にふれあい、知的交流にも努めた。

羅森の人物評として、『ペリー提督日本遠征記』の編者フランシス・L・ホークス¹⁸が、第二巻に次のような前書きが付録として採録された。「二度目の日本訪問に向けて中国から出航する際、通訳のウィリアムズ氏の助手として働いていた。彼は非常に教養があり、優秀な中国人だ。彼がほかの者と一緒に艦隊に加わった。観察眼の鋭い彼は、中国に帰国する際に、日本訪問時に記した日誌は、教養ある中国人の知性を的確に表しており、また、周囲のアメリカ人の考えに影響されない東洋人（言葉の壁のためあまり意志の疎通がうまくいかなかった）としての見解が記されているため、合衆国の読者にとっても興味深いものと考えられており、この巻の付録に付け加えた。」¹⁹

そして、『日本日記』を通して羅森が自分の見た日本像を中国の人々に紹介した。開国の目撃者である羅森は鎖国の日本と開国の日本をともに経歴したことがある。鎖国の日本にはまず純朴な

雰囲気、そして中国と比べてより合理的な官吏登用制度、男女の区別もあまりない、しかも、中国文化への尊びといったような特徴が著しい。そして、開国の日本には対外態度にも対外貿易にもある程度の開放が表れ、鎖国なのに外国への関心と新しい技術への好奇心も『日本日記』に見られる。また、異文化交流の中で、中国人の羅森にも不思議と感じたものがいろいろある。その中で、特に一番印象深いのはやはり日本の性風俗と力士のことであろう。

参考文献

1. 王晓秋点 史²⁰鵬校 『羅森等早期日本游记五種』 1983年3月 長沙：湖南人民出版社
2. 邢永鳳 「日本の「開国」と中国人——羅森と彼の『日本日記』」 『日本思想文化研究』 第八期 2007年1月 日本国際文化工房
3. 王晓秋 『中日文化交流史話』 1996年12月 北京：商務印書館
4. 王勇、中西進 『中日文化交流史大系・人物卷』 1996年12月 杭州：浙江人民出版社
5. 鐘叔河 『東洋から西洋へ』 2002年 長沙：岳麓書社
6. 鄭青榮 『羅森物語——中国広東人羅森の事跡——近代日中文化交流の先駆者・安政開国の「助っ人」』
<http://www.chunichi-kaiwa.com/luosen/luosen20-a.htm>
7. 王勇 『中国史のなかの日本像』 2002年 農山漁村文化協会
<http://www.japanology.cn/japanese/book/nihonzo/>
8. 王晓秋 『近代中国と日本——互動と影響』 2005年8月 北京：崑崙出版社
9. 陶徳民 「日米和親条約交渉における中国語の役割——羅森『日本日記』等に関する再考」
Nichibunken Japan Review(17), 91-119, 2005
10. 加藤祐三 『黒船異変——ペリーの挑戦』 1988年 東京：岩波新書

¹ 今の琉球藩のことで、1429年から1879年にかけて琉球王国として存在していた。ペリー来航のとき（1854年）当時は独立な王国として存在していた。『日本日記』の中に「自明以来、世封王爵、叨列藩籙」と書いて、琉球は明朝から独立な国として存在した。

² 『日本学』 第5輯 北京大学出版社 P141-151

³ 『現代中国事情』 (18), P96-103

⁴ 『Japan Review』 (17), P91-119

⁵ 『日本思想文化研究』 第八期 日本国際文化工房 P53-60

⁶ ここでの「鎖国」と「開国」は単に条約の調印を境にした時間をさすだけではなく、その傾向と兆しによって分けられる。

⁷ マシュー・カルブレイス・ペリー (Matthew Calbraith Perry, 1794~1858)

- ⁸ Samuel Wells Williams、中国語の名前は衛三畏、1812～1884
- ⁹ 香港の英華書院が発行された月刊誌で、1853年8月発足、香港で初めての中国語の雑誌である。
- ¹⁰ 羅森の『日本日記』は中国語の簡体文で書かれたが、日本文と文体が異なるため、本文では繁体字に変換する。日本文での違和感を少なくするためである。以下の引用文はすべて同じである。
- ¹¹ ここではカリフォルニアの音訳である。
- ¹² ここでは、ポルトガル人がキリスト教を布教するために、キリシタンが日本全国に広がり、後島原の乱さえ起こしたことをさす。
- ¹³ 現在北海道の函館市を指す。
- ¹⁴ いわゆる八股。
- ¹⁵ すなわち程顥（1032～1085）で、中国北宋時代の儒学者。字は伯淳、明道先生と称された。朱子学・陽明学の源流の一人。
- ¹⁶ バーナード・ジャン・ベッテルハイム（伯徳令、Bernard Jean Bettelheim、1811～1870）は、日本に派遣されたキリスト教宣教師。また沖縄県地域最初のプロテスタント宣教師でもある。
- ¹⁷ ここでは幕府の将軍つまり当時の徳川家定を指す。
- ¹⁸ Francis L. Hawks(1798～1866)
- ¹⁹ 『羅森物語』 中国広東人羅森の事跡—近代日中文化交流の先駆者・安政開国の「助っ人」 鄭青榮

（程永超：山東大学外国語学院）